

震災遺構 未来のため保存

佐藤 敏郎

大川小遺族



さとう・としろう
1963年生まれ。元中学校国語教諭で「大川伝承の会」共同代表。震災で大川小6年だった次女を亡くす。同小での語り部や、全国の学校で防災の講演活動を続ける。

宮城県石巻市の大川小学校では、東日本大震災の津波で児童70人と教職員10人が亡くなり、今も4人が行方不明だ。地震後、津波が校舎周辺を襲うまで約50分、近くに子供らが普段から上っていた裏山がありスクールバスも待機していた。迎えに来た保護者も津波の危険性を伝え、避難する時間も手段も情報もなかった。現場にいた先生も子供たちを守りたかったはずなのに、避難するという「判断」と「行動」につなげられなかった。

大川小は昨年7月、震災遺

構として一般に公開された。子供たちの命を真ん中において「なぜ守れなかったか」を一緒に考える場所だ。保存か解体かの議論がなされたのは、震災発生からまだ4、5年ほどの時期だった。遺族や住民の間に「見るのがつらい」という声も根強く、私自身「もっと対話を重ねてから決めるべきだ」との思いがあった。卒業生の子供たちが「残して」と声を上げ、市も保存を決めたが、簡単に残ったわけではないことを、知っておいてほしい。

大川小が他の震災遺構と違うのは、ここで多くの命が失われたことだ。最近公開が始まった石巻市の門脇小や福島県浪江町の請戸小は、児童が無事避難できた。そのため、どのように命を守ったかなど伝えたいことが明確で、展示も分かりやすい。一方、大川小の伝承施設は「なぜ避難できなかったか」の解説がなく、訪れる人が知りたいことこの間に大きなずれがある。

だからこそ、「なぜ」命を守るための判断や行動が取れなかったのかや事前防災の大切さを、遺族や住民からなる語り部が伝えている。案内できるのは訪問者の1割ほどで、肝心なことを知らずに帰る人は少なくない。伝承は、事実を知り、考察し、学んで未来に意義付けるもの。事実が曖昧では学びにならない。

「ダークツーリズム」「負の遺産」といった言葉もあるが、私にとって大川小は、子供らと過ごした楽しい思い出の場所だ。見学者も「今をもっと大切に生きたい」といった感想を寄せてくれる。絶望ではなく、希望を持って帰る人は多い。案内では必ず、大川小の校歌を紹介し「悲惨でかわいそうなだけの場所ではなく、『未来をひらく』場所なんだ」と伝える。見学者からは「普段の防災訓練は大切な人を守るためだと分かった」などの感想が寄せられ、自分事として捉えてくれている。こちらの想像よりはるかに深く、学びと気づきを得る場になっていると感じる。教室は、被災直後のままではなく、きれいな状態になっている。それは児童や教職員の遺族、ボランティアらが掃除を続けてきたからで、校舎はあの日だけでなく、あの日からのことも語りかけてくれる。一方で、11年が過ぎ、卒業生が描いた壁画ははがれ、校舎内は雨漏りで傷みが目立つ。市に対策を求めているが、放置されている。大川小は遺族だけのものではなく、遠くの人、未来を生きる人の学びの場であるべきだ。だからこそ「何のために残し、何を伝えるためにあるのか」を考え続けなければいけない。

【聞き手・百武信幸、写真も】